

池田文書の研究 (49)

医師の書簡 (その8)

池田文書研究会

[143] 山根純造の書簡

山根純造の詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

1 明治15年6月5日 (2968)

(封筒表) 駿河台北甲賀町 池田様 御執事申様
伊東方成内 山根純造
(封筒裏) (別筆 第六月五日夜投函)

永田町老丁目十七番地
(消印 東京・一五・□・六・ロ) (切手 壹銭)
拝啓仕候、陳昨日ハ遠方大先醒伊藤様^(マツ)え奉懸御足
勞奉拜謝候、即チ今日午後四時私參上其節、体温三十七度、
脈搏八十動、今正午ニ大便多量ニ通申候、其他昨日之通り
些異症無御坐候、乍併毎々申上兼候得共明日又々御高診
奉願上候、右は容体御依頼申上度候間、可然様被仰上被下
度奉希候、先ハ為其草々頓首拝

六月五日 伊東内 山根純造
池田様 御執事申様

[144] 山本玄道の書簡

山本玄道の詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

1 明治 年7月24日 (2970)

御処方箋入置候間、御教授被下度候
毎々竹屋殿⁽¹⁾之儀ニ付御回診被降難有奉鳴謝候、
扱昨日ハ御処方箋頂戴仕難有、然ル処、従五位殿之御
処方方の薬品名前相分り不申候ニ付至急御教授被成下
度、○印相付け置候薬品のみにてよろしく御坐候、此段
奉希候、先ハ如此御坐候、勿々頓首

七月廿四日 山本玄道
池田様

(1) 竹屋^{みつあり}光有 堂上公家。代々儒道・插花を以て奉仕。幕末期朝議取り纏めに活躍。明治元年皇太后亮。文化8年生、明治16年6月26日没。子爵。享年73。(1811-1883)

[145] 山本長安の書簡

山本長安は麴町にて内外科開業。

1 明治 年8月27日 (2977)

過日は初て奉得鳳眉難有仕合ニ奉存候、陳は児嶋氏⁽¹⁾患者去ル廿四日ヨリ被仰聞候通り稀塩酸ノ水剤、廿五日同方且ツキニーネ⁽²⁾ノ頓服、廿六日同方、本日も同方ニ仕置候、乍併先日以來不大便ニ付今朝浣腸相施候処、大便一回有之候、惣体之景況過日之通りニ御座候得共、脈度体温左之通ニ御座候

廿五日 午後五時 脈百二動 温三九度四分
廿六日 同時 脈八十二三動 温三十八度五分
廿七日 同時 脈八十四五動 温三十九度二分

兎角胸部之苦痛ハ同様ニ御座候由、滲出物も有之候哉と被存候、食欲大ニ減シ薄粥少許相用而已、渴有之ニ付冷水類ニ相用申候、惣体衰弱ハ相見へ申候、過日尊諭之通り今日迄手当仕置候得共如何之ものニ候哉、是迄之薬方持長可仕候もの哉、奉伺度奉存候、乍御面倒被仰聞候様奉願度奉存候、草々頓首

八月廿七日

✍

池田大先生 玉案下 山本長安

(1) 児嶋益謙 和歌山県生。陸軍卿官房長。池田謙齋宛児嶋益謙の書簡8通あり、「著名人の書簡」に於て記す。

(2) キニーネ 解熱剤. マラリアの特効薬.

池田大先生 玉床下

山本長安

2 明治 年3月17日 (2976)

春寒甚敷御座候処、益御清祥被為渡奉恭賀候、陳は尔来御無沙汰罷過申訳無之次第御高恕被下候様奉願上候、扱 此度ハ又児嶋益謙方え御見舞被下、御繁務之御中何共奉恐入候事ニ御座候、其砌御高按之義委^(ママ)被仰下、且ツ薬方書迄拝見被仰付難有仕合ニ奉存候、早速御教示之通リニ水剂・丸薬共相用候処、一昨日は気分爽快ニ相成候様子にて頭痛も至て軽ク相成候由、誠以毎々難有奉存候、丸薬一週間分もと被仰下候間、跡は水剂のミニて景況相試可申と奉存候、右は一応之御礼旁患者軽快之様子一寸奉申上候、何れ尚又近日奉申上候、草々頓首拜

三月十七日

✍

池田先生 玉床下

山本長安

3 明治 年3月18日 (2975)

昨日は難有奉存候、陳は児嶋患者昨日直ニ浣腸仰之通り相施候処、浣腸之水液而已ニ御座候、依て今朝又昨日之通り相施候処、又々水液ニ少許粘液ヲ混候而已御座候、昨日御高診被下候後十二時頃迄吐スルコト七回ニ御座候、午後平穩にて今朝迄安眠ニ御座候、其他異状無之候得共、惣体衰弱ハ逐日増進之景況と被存候、此段今朝之容子大略奉申上候、御薬ハ昨日之通り今日も投与仕置候、尚宜奉願上候、草々頓首

三月十八日

尚々明日も又々相施シ可申哉、如何可仕候哉奉伺置候也

✍

池田大先生 侍史御中

山本長安

4 明治 年4月1日 (2979)

本文奉申上候通り昨(欠)相応ニ多量之便通有之候得共、何分ニも便色依然黄色ニハ(欠)不申、甚々以困却(欠)如何之事ニ御座(欠)奉存候、不備

✍

5 明治 年3月10日 (2978)

益御清祥奉恭賀候、陳は昨日は児嶋方へ御高診被下難有奉存候、扱 其後御高諭之通り手当仕候処、昨夜ハ通宵安眠不致候処、今朝来大ニ緩解疼痛も先ツ緩ミ居、乍併凝結ハ同様ニ御座候、昨夜吐氣有之候得共、今日は未タ嘔氣も無之下利も昨夜来一行も無之候、小便ハ今日両度有之候、昨日御話之道明寺⁽¹⁾白糖ヲ和シ一碗相用且ツ米煮汁も壺碗相用申候、今朝来渴無之候、肌熱ハ少シモ無之平温ニ御座候、脈搏百十動位ニ御座候、今日は昨日と異リ終日安眠折々日ヲ覺シ水或ハ薬剂等相用居候、諸症先ツ平穩ニ御座候、右は景況大略如此御座候、猶又異状御座候へは早速可奉申上候、草々謹言

三月十日 午後七時半

山本長安

池田大先生 侍史御中

(1) 道明寺 道明寺^{ほしいい}糯^{ほしいい}の事. 糯米を蒸して乾燥させ粗挽きしたもの.

6 明治 年9月20日 (2974)

秋冷相催候処、先以て益御清祥被為渡奉拜賀候、陳は私旧知事飯倉徳川茂承⁽¹⁾方二女⁽²⁾当年十一歳ニ相成候処、去ル八月十九日より劇熱相発ニ付早速岩瀬氏之千葉立造治療ニ御座候処、未タ駈と不相成、十五六日来気分等ハ爽快食欲も可也ニ有之候得共、毎日午後ニ至り体温三十七度四五分ニ昇申、何とナク衰弱相加り申候ニ付、旧知事方にて甚々心配被致、是非共大先生御一診奉願上度旨ニ御座候間、御繁忙之御中奉恐入候得共、明日中御枉車奉願上候、草々頓首

九月廿日

本文之通りニ御座候間何分ニも御廻診之程奉願候、可相成ハ幾日頃御枉車被下候哉、略奉伺置候、其刻是非共私義も出張仕り拜謁之上猶患者之景況委曲可奉申上候と奉存候也

✍

池田大先生 玉床下

山本長安 拜

- (1) 徳川茂承^{もちつぐ} 第14代將軍徳川家茂^{いえもち}の嗣養子。
侯爵。
- (2) 徳川茂承^{もちつぐ}の2女孝子^{たか}。後に侯爵 伊達（伊
予宇和島）宗陳夫人^{むねのぶ}。

[146] 吉田健康^{けんこう}の書簡

吉田健康は越前国福井生。福井藩医。慶応3年長崎遊学，明治8年長崎病院長。長崎の医学発展に貢献。弘化元年生，明治28年9月没。享年52。（1844-1895）

- 1 明治 年1月5日 (2998)
（封筒表）到 東京駿河台北甲賀町 池田謙齋様
謹賀（消印 長崎・一・七）（切手 二銭）
（封筒裏）鎖 一月五日 従 長岑新町 吉田健康
履端^{（カ）}の御賀千録万寄芽出度被迎春之時，珍重之
御事ニ奉存候，次て野子も無恙重馬齡候間，乍恐
御休慮被下度候，先八年甫御祝義申上度，草拜
一月五日

[147] 吉田軍平の書簡

吉田軍平の詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

- 1 明治9年9月2日 (2999)
一別已来御安否モ承知不仕候得共，腐墨拜呈仕候，時候朝夕は秋冷漸相促候処，倍御安健ニ御起居被遊御送光奉遥賀候，陳は長々航海被遊無恙御帰朝，皇国未曾有之大国手ニ御昇進可賀々々，小生迄大慶罷在候，四月中新聞紙にて一見仕候間，五月上旬態々出京御尋申上候処，豈図未タ御帰朝ニモ相成不申，空ク帰国仕候，小生も上州緑野郡藤岡と申処ニ亡父讓庵之親友大戸甚太郎之周旋にて去ル寅年ヨリ開業メクラ経験碌々日ヲ送り候始末御一笑被下度候，入澤恭平先生モ泉下之客と御成被遊浮界とハ乍申可惜々々御愁傷奉察上候，乍然貴君之英名海外え御発シニ相成候ヲ泉下え達シ，恭平先生モ定て御愉快と奉存候，小生も辰年帰省之せつ拜顔万話仕候ガ生別と相成申候，十月中旬ニハ両親之年回旁帰省之心組ニ罷在候へハ，何なり共小生相応之御用向御坐候ハ、被仰付度

候，余は拜顔之せつ万々高話ヲ得度，今ヨリタノシミ居申候，匆々頓首

九月二日夜認 中条新田 吉田讓庵男 謙助
改名 吉田軍平 拜
池田大マストル □几

[148] 吉田周利・吉田京佐の書簡

吉田周利は子爵 錦織教久家の掛り付け医師。麹町にて内外科開業。周利の書簡は日本医史学雑誌第54巻第4号404頁錦織教久の項に2通掲載。未掲載分を記す。吉田京佐は周利の息子。

- 3 明治 年8月3日 (3002)
（端裏書）池田先生 病用 吉田周利 拜
（別筆 叙北白川宮様認出ス 謙齋筆カ）
拜啓，炎暑難凌御座候処，愈御安泰奉恭賀候，陳ハ北白川若宮様本日午前第二時奉拜診候処，少々御中暑御気味ニ被為入御脈搏百二十御体温三十七度八分，御腹満御腹痛御泣啼強ク被為入候ニ付，不取敢蜂蜜之灌腸ヲ差上，傍ラ極ク小量ニ非沃斯⁽¹⁾エキス之丸子奉調上置候，其後先ツ御穩ニ被為入候，右御容子申上候間，本日御繰合御参診ヲ奉乞候，委曲ハ奉得鳳眉候節可申述候，匆々敬白 拜
八月三日

(1) 非沃斯^{ひよす} 鎮咳嗽剂。鎮痛剂。

- 4 明治 年9月20日 (3005)
（端裏書）池大先生 閣下 病用 吉田周利 拜
謹啓，尔後愈御安寧被為入奉恭賀候，陳ハ麹町区下式番町七十壱番地華族小笠原長生母去ル十七日頃ヨリ膀胱炎之気味にて殊外被致難儀，昨今ニ至リ尿通利不宜外症種々混シ迂生施治候処，不容易症状ニモ陥リ歎ト心配罷在候ニ付，御繁務被為入候央奉願上兼候得共，何卒御繰合御高診被成下度，病門ハ不及申ニ迂生ヨリ伏て奉懇願候，鳥渡参堂可奉願之処，差掛り大患者引受，乍略儀以愚毫奉願候段御海容可被成下候，是迄右患者履歴等ハ奉得鳳顔節篤ク可申上候，右相願度，匆々拜白
九月廿日

二仲、過日来根岸ノ旧主人松平直亮⁽¹⁾妹於逸儀、⁽²⁾実扶的里亜ニ係り、先生之御施療ヲ相受漸次軽快相成、全ク先生之御蔭故ト奉感謝候、何れ得拜顔御礼可申上候、旧主人も難有かり罷在候也

- (1) 松平直亮 旧出雲松江藩主。伯爵。
 (2) 実扶的里亜 法定伝染病ジフテリア。

5 明治 年12月9日 (2997)

拝呈、愈々御安康奉大賀候、陳は父周利病中ハ御厚診を蒙リ千万奉拜謝候、然ルニ昨八日午後十一時十五分死去致候ニ付、此段乍失敬紙上を以て御報知申上候也

十二月九日 吉田京佐
池田大先生

[149] 吉田弘の書簡

吉田弘は明治29年侍医局医員、弘は池田謙齋の甥(謙齋の姉行田八重子の次男)に当たる。

1 明治 年5月29日 (3006)

拝見仕候、結構ナル御返歌給ハリ難有永ク座右之銘ト致シ珍藏可仕候、昨日来御不快ニ被為入候由、折角御養生専一ニ御自重之程奉祈候、御送附被遊候御歌本日差出ス申ベク候間、左様御承知被下度候、何レ其ノ内参堂御礼申述ベク候得共、不取敢書中ヲ以テ御礼申上候、皆々様へ宜敷御伝言ノ程奉願上候、草々拝復

五月廿九日 弘 拝
御叔父上様 玉案下

2 明治 年4月27日 (3007)

兎角不順之時節ニ御坐候処、御一統様愈々御機嫌能ク被為入大慶至極ニ奉存候、陳は去ル廿五日御手紙頂戴仕候処、私儀去ル廿四日ヨリ一週間ノ予定ヲ以テ当葉山御用邸へ出張ヲ命ゼラレ滞在罷在候為メ、御返書モ差上申サズ失礼仕候段、幾重ニモ御悔恕被下度奉願上候、又其節ハ何ヨリ好物ノ品々沢山頂戴仕難有厚ク御礼申上候、当地ハ数日前ヨリ毎日曇天ニテ南ノ強風吹荒ミ、従ツテ怒涛

凄シク為メニ夜中安眠ヲ破ラレ候事モ御坐候、今朝来風モ漸ク静マリ候得共、細雨降り誠ニ鬱陶敷天氣ニ御坐候、峰太⁽¹⁾儀ニ付私之意見左ニ開陳仕候、即チ敏太君⁽²⁾ト同意見ニテ折角本人ノ請願モアリ、且ツ改悔ノ模様モ相見へ申候ニ付、此際一応出京ヲ許可シ嚴重ナル監督^{トク}ノ許ニ勉学為致、其ノ上ニテ悔悟ノ模様ナケレバ断然兵役ニ服セシムナリ、或ハ其ノ他ノ方法ヲ取り然ル可キモ此ノ場合一端本人ノ請願ヲ許容致し候方宜敷ヤト奉存候、若シ膺懲ノ目的ニテ国許ニ兩三ヶ月モ抑留シ、反ツテ自暴自棄ヲ起サシムル場合ニ立チ至リ候テハ将来実ニ寒心ニ堪ヘザル事ト奉存候、若シ出京ヲ許ストスレバ差当り私ノ宅ヨリ通学致サセ候ヨリ他ニ良策ナキカト奉存候、何レニスルモ将来再遊学ヲ許ストスレバ兩三ヶ月ノ遅速ヲ論ズルノ必要ナク、却ツテ本年暑中休暇后出京致サセ候方宜敷カト存候得共、前陳之通り心神ヲ腐朽セシメ候様ニ相成候テハ本人ノ為メノミナラズ敏太君ニ対シテモ一大不幸ト奉存候ニ付、試験ノ目的ヲ以テ(本人品行ノ試験)此ノ場合御許容相成候方可然ト奉存候、此ノ私ノ意見ハ敏太君迄先般申送り候、先は乍延引右御礼旁愚見申述候、何レ来月一日帰京之筈ニ御坐候間、拜顔之上万縷可仕候、草々拝具

四月廿七日 弘 拝
池田御叔父上様

乍末毫御叔母上様御始メ御一統様へ宜敷御鶴声被下度奉願上候

○柳原典侍殿ニモ其后追々御快方ニテ晴天ニハ必ズ朝夕一回宛庭内ヲ御運動遊サレ候

(1) 入澤峰太 池田謙齋の弟 茂(入沢家当主)の次男、吉田弘の従弟。

(2) 入澤敏太 池田謙齋の弟 茂の長男。父茂は明治29年病没したので、本書簡はそれ以降30年頃のものと思われる。

[150] 李家文厚^{りのいえぶんこう}の書簡

李家文厚は天保6年長州藩医家に生まれる。明治5年軍医寮出仕、21年広島衛戍病院長。後に広島にて私立博愛病院を設立。大正6年没。享年

83. (1835-1917)

1 明治 年4月28日 (3030)
 弥御清祥奉大賀候，過日来熱海行後，山縣公漸々快復御同慶ニ奉存候，又山縣細君過日来咳血も有之候由にて，御一診相願候て御処方之薬，原氏⁽¹⁾より貰ヒ服用中之処，時々胸痛等も有之，旁懸念ニ付何卒御一診御願仕度，主人よりも留守中別て御注意被下候様御願申上呉候様申事ニ御座候，転地等も為致可然候ハ、御申付被下候様申上置候様との事也，幾重も御多忙中恐縮之至ニ候得共御來診奉願候，為其申上度他ハ後日申縮候御事（以下不明）

四月廿八日

尚々本日より有馬行仕候，当分不得拜青，時下御自愛奉専祈候也

✍

池田先生 侍史 前願中略封高許
 李家文厚

(1) 原桂仙 山縣有朋家出入りの医師。天保10年信濃国医師の家に生まれる。明治3年ドイツ留学。帰朝後陸軍々医となる。12年医院開業。22年没。享年51。(1839-1889)

2 明治 年3月4日 (3031)
 拜啓，昨三日御來診後，灌腸相施結便大塊数多通シ候処，何分便硬にて通泄も相困シ，今後之処如何処置可仕候哉，昨日之景況にては是迄之灌腸劑にては通泄余程困難ニ被察候間，下劑か又はリシネ⁽¹⁾灌腸ニ共転用にては如何哉，高案奉願候，乍御手数処方之義御回答奉願度，為其草々頓首

三月四日

✍

池田先生 拜呈 李家生

(1) リシネ ひまし油。下剤として用いる。

3 明治 年12月10日 (3032)
 昨夕は御來車被成下難有奉存候，陳はおすて殿事昨夜一時頃より俄ニ諸症変化シ直視背反張等之形

状も相見得，且ツ前顛門之緊張突起共稍増進いたし，加之ナラス顛顛静脈怒張シ然して微ニ痙攣有之候て何分危険症ニ被伺候故，何卒御差繰被遊候て御來診奉願度候，右御願迄如此書走仕候也

十二月十日 李家文厚・南部一政
 池田先生

[151] 若嶋桂三・桂三の母の書簡

若嶋桂三の詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

1 明治20年2月5日 (3202)
 新陽之候益々御多祥ニ被為渡奉大賀候，次ニ少子無異消光罷在候，併シ追々当国之事情を聞見するニ從ヒ実ニ恐懼ニ不堪事も有之候，就中少子等同船之医師七名通弁官十名は布哇国⁽¹⁾代理公使之名義にて條約致し，昨年二月十五日当国ニ着仕候，然るニ政府費用之莫大なるが為ニ之を任用せず，単ニ出稼通弁・医師ニも有様ニ有之候，尤モ條約丈之給料は請取居ながら出処も承知不仕，皆々不思議と思居候，然る処少子外通弁官二名は昨年十二月廿三日総領事安藤太三治氏之尽力ニより任命状下付相成候，是は布哇國中第一苛酷と評判あるカワイ崎コロア砂糖会社ニ雇入有之日本出稼人八十余名常ニ苦状^(マツ)多き為め政府通弁・医師之出張滞在を以テ必要なりとし，幸の機会にて同船医師七名中少子丈右任命状仕所持致せし事と御座候，是が為め困難なる場所ニ出張仕り余分精神ニ痛苦を相覚候得共，蹉躑は他日之経験と無抛喜んで赴任致候，頓首謹言

明治二十年二月五日 桂三 拜
 池田從四位様 坐下

(1) 布哇国 ハワイ国。1898年(明治31年)米国に併合される。

2 明治 年9月29日 (3358)
 拜啓，秋冷之節御坐候へ共，先以御尊家御一統様御揃益御安全奉賀候，陳は先頃内ヨリ段々と御厚志ニ預り難有奉存候，扱 春達義養生不相叶終ニ本日前十時死去致候間，此段御通知申上候，就て

は親族共打寄相談仕候処、当分仮之出棺致置、追て俸布哇より帰国之際本葬致心組、尤も明日ニモ桂三方へ書面差出し、其返事次第にて猶跡々取計候事ニ談事相整候、御報申上候も恐入候得共、是迄御心配ヲ蒙リ候間不取敢上申仕候、先ハ当用草々頓首

九月廿九日 若しま桂三 母より
池田御先生様 上

[152] 渡瀬正造の書簡

渡瀬正造は宮内省御用掛、鍼灸医。正造の書簡は『東大医学部初代総理池田謙斎』下巻に1通掲載に付省略。

[153] 渡邊欽三の書簡

渡邊欽三の詳細不明。書簡の内容より医師と推定した。

1 明治 年1月13日 (3045)

謹啓、陳過般御遠路之処御往診被下候段難有御厚礼申上候、扱て松波御老人御容体左に大略申述仕候也

九日 体温 三十七度六分^(ママ) 腺搏 九十至
牛乳 四合・鶏卵 四個 一日量 小便 三四回

十日 体温 三十七度四分 腺搏 八十八至
食量前日ノ通 小便前日大差ナシ 大便一回 但し軟便大量

十一日 体温 三十七度四分 腺搏 九十六至
牛乳 三合・鶏卵 四個・粥汁 一碗半 小便 全ク 大便一回 但し少量

十二日 体温 三十七度二分 腺搏 九十至
牛乳 三合・粥汁 三碗 小便全ク 大便一回 全

十三日 体温 三十七度三分 腺搏 九十一至
食量前日ノ通 小便全ク 大便一回 全

右之如き外略御容体ニ候、安眠の方ニ候、気分も至りて昨日来より宜敷相成り候、御処方ハ先生の御指命通り水薬相用咳嗽ハ至りて減少す、食慾も佳良の方なれとも何んとなく気分鬱閉の方、体温も漸く減少致候間、御指命の「テレピン油相用度

候間、甚だ御繁用中恐縮ニハ候得共、先生より鳥^(ママ)度 御本人え御一報相願度、失礼乍此段御願申上候、信用上看護人も大いに宜敷相考へ候、御老人時々小供の如き感念出起候間、先生より鳥度御一報被下度御願申上候、早々不一

追日一般症状ハ宜敷と存られ候、只亦少量の咳嗽の為ニ漸々困却の事

一月十三日 渡邊欽三 拜
池田国手 閣下

[154] 渡邊賛の書簡

侍医を勤める。

1 明治 年7月16日 (3047)

拜呈、本月十三日付之芳翰本日午後着、并ニ勝野へ被托候花章共両儀洗手拝読仕候、先以御佳適被為渡候条欣拵奉恐賀候、随て両典侍先平穩入浴運動適度精神舒暢之容子相見受申候、柳原殿にも格別之異状ハ更ニ無之、去ル十日頃より左膊ニ麻痺を発シ諸筋聊緊張ヲ訴ふ、依て十分時間斗エレキヲ施スコト二日間、竜腦丁幾⁽¹⁾之摩擦を試ミ漸次軽快ニ趣申候、其後ハ微痛を覚候ニ付、軽く按摩を試候、強いて気分ニ関し候程之義ハ更ニ無之候、小腹を按スレハ擧痛を覚候へ共、独発痛ニは無之、平素之微痛倦怠を自覚スルノミ、睡眠ハ先佳也、食欲ハ頗ル旺盛シテ兩三年已来之上出来と被申居候、入浴も日ニ三回ツ、被試候、其他異状無之、一昨日も水沢迄運動、殊ニ不入之瀧遠見被致候、只々月末之平穩今より祈居候、

一、勝野へ被托候御菓子二品早速両典侍へ差出候処、不取敢玩味被致御厚配之段宜敷謝詞可申上旨被申出候、尚又不存寄美茗⁽²⁾沢山三名へ御投与被下置、甚以恐縮仕候、日夜拜味仕候義と難有奉深謝候、柴田・岡本兩老人よりも呉々厚謝申出候、尚早夕兩典侍万一異状も有之候節ハ電報にて可申上候間、其節ハ御苦勞等奉願候、不取敢再応之貴酬迄如是ニ御座候、書外ハ重鴻可尽候、頓首

七月十六夜認 渡邊賛 謹白
池田老先生 侍曹

再伸、貴境ハ暑威相募候趣、随時御自愛奉祈候、当地ハ不相変冷蒸湿雨不整之時季困却仕候、正

午大抵七十五・六度⁽³⁾ニ御座候也

三白、乍恐御序之節、侍医御一統様へ宜敷御鶴
声奉祈候

- (1) 竜腦丁幾 植物木部より抽出した芳香性ア
ルコール溶液。
(2) 美茗 美味のお茶。
(3) 華氏 75 度は摂氏 24 度。

[155] 浅岡清・さだ・清旦の書簡

浅岡清は軍医。清は池田謙齋の兄恭平の妻ただ
の弟、又竹山屯の弟で竹山山と云った。後浅岡清
旦の嗣養子となりその娘さだ（定）と結婚し浅岡
清となる。

1 明治 11 年 9 月 3 日 (9)

(封筒表) 東京駿台北甲賀町十五番地

池田謙齋様 静信御親展

(消印 新発田・越後・九・三) (切手 一銭二枚)

(封筒裏) 封 九月三日投函 越後新発田下町

元大倉屋下店 浅岡清

一翰奉拜啓、時下残暑未タ退兼候処、益御清適御
起居被為遊御座奉欣扑候、随て私義無事消光罷在
候間、乍憚御休神被下度候、然は先日ハ新潟にて
奉拜顔御高談拝奉万謝候、併余り急速御暇申上
失礼至極ニ奉存候、愚妻義御診察被下是又難有奉
存候、廿四日ニ帰宅仕候、私も廿二日ニ貸家へ引
移り申候

○二十三日ニ御出発⁽¹⁾被遊候由、御道中ハ御障り
も不被為在候半哉と御安事申上候、尤も八十里越
之跡ニ候得は格別之御事ニも有之間敷、併し奥様
ニハ御困却被遊候事と奉遜察候、二十八日比ニハ
御無事御着と奉存候

○先般私共当地着後直々可申上之処、彼は延引仕
候内御下向之由承り其後御賢母様へも頓と御伺不
申上何共恐縮仕候、宜敷御詫奉願上候

○当所も病兵ハ土地不潔飲水不良之割リニハ不足
ニ御座候、脚氣も先月二名斃れ候外怪症六七名計
其他之病兵も甚不足、尤も隊長始一般衛生ニハ注
意仕居候、同症之治験録ニテも出来候ハゞ御送り

被下度奉希上候

○市中診察も少々ハ御座候得とも未タ十分ニ無
之、且合併ニテ前医官之仕来通り是も都合ニ寄
り模様替仕度候

○御奥様へ御土産も可差上之処彼是混忙仕候間、
帰京之上寛々御礼申上度候、愚妻よりも一封可申
上之処是も彼是取紛れ私より宜敷申上候様加書申
出候

○砲兵之暴動⁽²⁾ハ存外之事ニ御座候、定て御道中
ニテ御聞上と奉存候、最早全ク鎮静之事ニ奉承知
候、事ニ寄れハ当隊も高崎迄テ出張と覚悟仕居
候、私共以下之勲章ハ先御仕舞と奉存候、斎藤氏
杯ハ先年台湾昨年ハ籠城致し候ても未タ何等之御
沙汰も無之候

○今般本省之御布達ニハ各大隊へ副医官一名当分
附属ニ相成候、左候へバ当地へも今一名附属ニテ
至当ニ奉存候、尤も兩人ニテモ可也間ニ合申候へ
ども一名病氣之節ハ困却仕候

○私も明四日出発佐渡が島へ下士官往診ニ出張仕
候、十四五日頃帰宅仕候積り、乍末筆御賢母様御
奥様へ宜敷御放言奉希上候、入沢茂二君ニモ
碌々御面会不申上甚失礼御序ニ宜敷奉願上候、時
氣折角御厭多奉祈上候、書外万々後鴻可申上候、
早々頓首

九月三日 清 拜上

池田様 閣下

(1) 明治天皇は明治 11 年 8 月 30 日より 11 月 9
日まで北陸・東海巡幸。

(2) 明治 11 年 8 月 23 日近衛兵の叛乱起る（竹
橋騒動）

2 明治 年 2 月 16 日 (3)

(封筒表) 駿河台 池田先生 煩御親展

福岡 浅岡清 拜

(欠) 下寒威弥増候処先以 (欠) 様益御壯健ニ被
為渡 (欠) 喜奉恭賀候、次ニ当方一同 (欠) 消光
罷在候間、乍憚 (欠) 慮被下置度候、然は (欠)
般来御次男⁽¹⁾様御病氣ニ (欠) 候趣、野父より此
程申送り (欠) 御伺も不申上奉恐縮候、(欠) ハ
如何被為在候哉、少々ハ (欠) 方ニ被為趣候哉、

一同御事案(欠)候、一ノ木戸太郎⁽²⁾様にも御同(欠)腸チヒユス症之御様子ニ拜承仕候、(欠)ハ同症常々沢山御座候(欠)仕候、扱又過日御依頼(欠)帯地本年中ニ御間ニ(欠)申度、漸去ル十三日出来上り(欠)気船間屋差出候処、漸ク(欠)之出帆にて神戸迄テ夫より(欠)横浜合原へ向差出し申候、(欠)五筋にて目方壱貫百〇七匁(欠)八拾三円〇式錢五厘、外ニ四十錢(欠)迄テ運賃諸掛トモに御座候、(欠)五拾六円五十七錢五厘、帯代(欠)御手元迄テ差上候筈ニ申(欠)候間御請取被下御宅様分(欠)計百四拾円御預り置被下(欠)ハ先日申上候通り内七十円ハ(欠)森祐彦⁽³⁾ノ学費ニ当テ御預(欠)候、残り七拾円新潟より為替(欠)等ニテ願上候ハバ差引之(欠)も御座候間、御渡シ被下度候(欠)野父方へハ総テ御尊君様(欠)帰京迄テ預り置被下候様御申聞ケ置(欠)度奉願上候、右申上度(欠)候、如此時気折角御(欠)奉祈上候、書外重便万々(欠)申上候、御奥様皆々様へ宜敷(欠)聞奉希上候、早々頓首

二月十六日 浅岡清 拜
池田様 尊閣下

(この手紙は開封時上二字分が破り取られている為(欠)が多い。又別筆にて次の書付が同封されている。池田謙齋筆ではない)
浅岡方へ御注文之帯代等百四拾円差上候筈、内七拾円ハ祐彦学費之宛ニ御預奉願度、又三拾円ハ八月十一月兩度之(欠)買物代敏子⁽⁴⁾へ御渡し(欠)成下候分返納仕候、残四拾円ハ尚又買物等敏子へ申遣し候儀も可有之候間、是又乍御厄介御預置被成下度御願申上候、拜願

- (1) 次男 池田謙齋の次男 次郎。明治11年5月19日生まれ。
- (2) 一ノ木戸太郎 行田嘉門に嫁いだ池田謙齋の4番目の姉八重子の長男 太郎。越後一ノ木戸に住む。
- (3) (欠) 森祐彦 越後熊ノ森に住む竹山祐彦。竹山屯の兄 亨の次男。
- (4) 敏子 石田伊助に嫁いだ池田謙齋の一番目の妹かづの長男 敏。

3 明治 年6月27日 (4)
(封筒表) 東京 池田先生 尊閣下
(封筒裏) 緘 第六月廿七日

福岡大名町九十五番地 浅岡清

一翰奉拜呈候、時下薄暑之候御座候処、先以御惣容様益御機嫌克被為在御座欣喜無量奉恭賀候、次ニ当方皆共無異消光罷在候間乍憚御休神被降置度候、然ば先生ニハ過日来御不快ニ被為在候趣一向不奉拜承昨日野父申来驚入候、併追日御快方ニ被為趣候哉ニ奉拜承候得共発熱咯血等之御容体も被為在候趣、誠ニ驚愕罷在候、申上候迄テも無御座候へ共御保養被為遊候様奉祈上候、然ル処西京御出張御用も被為在候趣無々御不都合奉拜察候、御病中御出張ハ御障りも被為在間敷候哉、可相成ハ御尊宅にて御加護被遊候方御宜敷ト奉愚考候、乍去京坂之勝地ハ多分御保養にて相成候半哉、何れにて略御快方之御出張被為遊候様仕度奉祈上候、尔来ハ意外之御無音申上奉恐縮候、去ル十八日附にて壱封差上候、是ハ昨年御預り願置候横浜大工音吉地券証頂戴仕度義ニ付、右状同人え遣し置候間持参仕候ハバ右地券証御渡し被下度候、右申上度御病氣御伺申上度時気折角御厭被遊度、書外重便万縷可申上候、早々頓首叩頭

六月廿七日 浅岡清 拜
池田先生 尊閣下

二啓、御満堂様乍憚宜敷御放声奉希上候

4 明治 年7月21日 (7)
七月十四日付御手紙今廿一日着拜見仕候、先以時候之御障も無之先生初皆々様御機嫌克被為渡御目出度奉存上候、然は御地ニ残し置候老人共不一方御世話頂キ難有奉存候、殊ニ先日ハ腫物にて先生之御療治頂キ早速全快仕候趣、誠ニ難有仕合ニ奉存御礼も申上様無御座候、扱又今般ハ私愚妻兩人一時ニ病氣仕、色々御心配被成下御見舞状も頂是亦宜敷御礼申上候、私ハ最早大ニ宜敷候処、愚妻ハ追々不宜困入候処昨日より少々熱下り候間少しハ安心仕候、しかし六日より食事ハ更ニ出来不申夫而已心配仕候、入沢君⁽¹⁾并ニ猿楽町⁽²⁾委細申遣し置候間宜敷御聞取被下度候、私も四五日之内ニ

出勤可仕と奉存候、色々申上度候へとも何分取込にて別段先生へも不申上候間宜敷被仰上度奉願上候、末なから時かふ御いとひ被遊度願上候、早々以上

七月廿一日 午後 浅岡清
池田御奥方様

尚々御地ハコレヲ沢山ニ御座候趣、当地ハ未タ無御座候、熊本辺ニハ七八人出来候趣、今日申来候、困入候

- (1) 入沢君 入澤達吉の事。
(2) 猿楽町 東京猿楽町に住む義父浅岡清旦の事。

5 明治 年7月29日 (10)

(封筒表) 東京 池田先生 尊閣下

(封筒裏) 緘 福岡大名町九十五番地 浅岡清

一翰奉拜呈候、時下酷暑之候ニ御座候処、御惣容様被為揃益御壯健被為渡欣喜奉恭賀候、次ニ小家皆々無事消光罷在候間乍憚御放念被下置度候、然ハ先般御病氣も追々御快方ニ被為赴奉大悦候、尚御保養奉祈上候、昨今之炎熱ニハ何分凌兼候間、御地も同様之事ニ奉存候、当地ハ本月一日より日々快晴三十日中一回之雨ニテ実ニ難渋仕候、毎日午後八九十二度⁽¹⁾ニ相成申候、扱又西野御老君⁽²⁾様も過日御出立ニ相成、敏子御供仕候由、此暑中ノ御障も不被為在候哉御案事申上候、扱又中猿楽町野父も過日来不出来様子ニ御座候趣、例之肝臓病再発仕候哉、格別之事も無御座候哉、御高診相願出候ハ、宜敷撰生等敵ニ御申聞被下度候、私共帰京迄テハ無事ニ罷在候様致度ト奉存候、弥六ヶ敷候様にてハ帰省も可仕哉も奉存候へとも時期ニ寄り許可にも不相成候間誠ニ心痛仕居候、就てハ来年頃帰京ニ相成候様仕度願上候、兼て之御普請も漸此程ハ御落成ニ相成候趣、嚙々御立派之事ニ奉遥察候、右申上度時気御伺迄テ以寸楮如此御座候、乍末紙御惣容様宜敷御放声奉希上候、書外万繰後鴻ニ可申上候、早々謹言頓首

七月廿九日 浅岡清 拜
池田先生 尊閣下

(1) 華氏 92 度は摂氏 33.3 度。

(2) 西野御老君 池田謙齋の実母 入沢はま。

6 明治 16 年 10 月 25 日 (6)

(封筒表) 東京神田区駿河台北甲賀町九番地

軍医監 池田謙齋殿 親展

(〔赤字〕書留 □一一二三)

(消印 博多・一六・一〇・二七)

(封筒裏) 緘 十月廿六日 福岡営所分屯隊病室

一等軍医 浅岡清

(消印 東京・一六・一一・四・へ)

(封筒下部に浅岡の封印あり)

(端裏書) 福岡大名町九十五番地 浅岡清

(九十五番地は異筆)

東京駿河台 池田謙齋様 御親展

一翰奉拜呈候、辰下秋冷相増候処、御満子様被為揃益御清適御起居被為遊御座欣喜奉恭賀候、次ニ小子無異消光罷在候間乍憚御休神被下置度候、尔来ハ御疎音ニ打過御申訳も無御座候、先般御容体も被為在候処、御入浴御帰館後ハ漸次御全快被為在候半ト奉存候、絶て御伺も不申上奉恐縮候、扱又先般御高配被仰付野父も御蔭にて追々快方、昨今余程工合宜敷様申送り誠ニ難有奉存候、愚妻よりも宜敷御礼申上候様申出候

○北越熊之森豚児⁽¹⁾出京種々蒙御厚情候趣是又奉謝候、該児も兎角不勉強之性質ト申事ニ御座候、参堂仕候ハ、御説諭被下置度願上候

一、金八拾円当地第十七国立銀行為替取組別紙証書差上候間、乍御手数御受取被下度候、御地小⁽²⁾船町一丁目第三国立銀行、右ハ入沢達吉殿学費宛ニテ新潟より申来候間御落手被下度候、竹山祐彦分も事ニ寄れハ来月末七十円程又々為替にて差上申度候、一応新潟え為聞合候上ニ仕度候

一、私も春来大ニ強壯ニ覚候処、又々本月上旬より感冒シ十日後より三四度午後熱発少シク悪寒アリ、背部時トシテ緊痛シ咳も少シハ増加シ少量ノ血痰三四回有之大ニ恐怖仕候、早速薬用其後ハ血痰并ニ熱発も無之候へども午後ハ常ニ気分悪敷困却仕候、併シ引籠り候程ニモ無之候、就てハ昨今ハレーフル⁽²⁾ニ強壯薬相用居候、然ル処来月上旬より肥後より豊後豊前へ之長途行軍十日間ニ百州

里余山路多シ、且自炊ニテ毛布一葉宛 内三泊ハ露営ナリ実ニ閉口仕候、迎も私当時之勢にてハ隨行致し兼候間副医官に依頼シ留營致シ度奉存候、何分隊附軍人ハ薄弱にてハ難堪困却仕候、就てハ来年ハ帰京ニ相成候様仕度、先般も緒方先生にも鳥渡願置候間、尚御序も被為在候候ハ^(印字)マ御漸被下度候、来年帰京ニ相成候へバ熱海え入湯十分ニ療養仕度候、一兩年にて身体強壯ニ相成候へバ又々在勤仕度候、何事も不健康にてハ面白無之、ヒボ⁽³⁾も相起り別して帰京之念相加里困却仕候、御憐察被下度奉願上候、将又来年一月末或ハ二月中ニハ小倉表へ引揚転移之事ニ御座候、是レ以テ困却仕候

○当地之産物帯地も近来之下落ニ御座候間、御思召被為在候縞柄御好次第御世話申上候間被仰聞度候、過日緒方様へ壱筋御送り申上候、乍末筆御奥方様皆々様宜敷御無沙汰之段深御詫申上度候、時氣折角御保養奉禱上候、書外重便万縷可申上候、早々叩頭頓首

十月廿五日

浅岡清 拜上

池田先生 尊閣下

(池田謙斎筆の添書あり)

御受取被下候ハマ羽書にて一寸御通知被下度願上候

(1) 熊ノ森豚兒 竹山享の次男 竹山祐彦.

(2) レーフル 肝油.

(3) ヒボ ヒポコンデリー. 心気症.

7 明治 年10月17日 (5)

(封筒表) 東京神田区駿河台北甲賀町九番地

軍医監 池田謙斎殿 煩親展

(速達) ([赤字] 書留 □ノ四二四)

(消印 小倉豊前・一〇・一七・い)

(封筒裏) 十月十七日 豊前国小倉室町五丁目

一等軍医 浅岡清

(消印 小倉・豊前・一〇・一七・い)

(四錢切手 二枚)

謹啓、時下追日秋色相催候処、先以先生御始御渾家様益御壯健ニ被為渡欣喜之至奉存候、次ニ小子一同無事消光罷在候間乍憚御休神被下度候、然ハ熊之森祐彦学費金七拾円第三国立銀行為替証ニテ遙送仕候間、毎度乍御手数御落手被下度候、同人も近来兎角不勉強隨遊蕩ニモ可有之哉ニ承り定て先生之御高配も蒙り居候半奉存候、誠ニ御申訳も無御座次第、尚精々御申聞ケ被下置度候

○入沢達吉子ハ夏以来脚気症之由、未タ全快も無之由、併シ為差事も無之哉とも奉存候

○先月ハ近年稀ナル大風にて嘸々御心配奉察候、併し御普請之御直折丈ケニ少しも御損無之様承り申候

○扱又小生も本年徴兵検査医官被仰付、急ニ明十八日熊本へ出張仕、来月初末ニハ又当地へ帰り、更ニ各県へ巡廻仕候、何れ帰宅一月末二月ニモ可相成ト奉存候、右申上度如此御座候、時下御保養奉祈上候、早々頓首

十月十七日

清 拜上

池田謙斎様 尊閣下

(浅岡清・さだ・清旦の書簡は次号に続く)

[主要参考文献]

朝日新聞社編『朝日 日本歴史人物事典』朝日新聞社 1994年11月30日発行

池田文書研究会編『東大医学部初代総理池田謙斎』上・下巻思文閣出版 2007年2月25日発行

日本歴史学会編『明治維新人名辞典』吉川弘文館 1981年9月10日発行

吉田忠・深瀬泰旦編『東と西の医療文化』より遠藤正治著「明治期の侍医制度と池田文書」思文閣出版 2001年5月11日発行

大植四郎編『明治過去帳』東京美術 1971年11月20日発行

稲村徹元・井門寛・丸山信編『大正過去帳』東京美術 1973年5月15日発行

(本稿に於いて詳細不明の医師 山根純造・山本玄道・吉田軍平・若嶋桂三・渡邊欽三に就きご知見のある方は順天堂大学医学部医史学研究室までお知らせ下さい.)